

The 4th International Fermentation Symposium (IFS)

日本招致についてのメモ

照 井 堯 造

1. 1964年4月 London における第2回 IFS の最終日 Closing Plenary Session において第3回 IFS の host が米国に決ったとの発表があった。IFS の内容はまさに醸酵工学シンポジウムであり、とくに engineering 面にその特徴をもっているのを見た私は、その席上日本醸酵工学会を代表してとまえおきて「第4回については日本を考慮せよ」と要望した。もちろん、日本学術会議に提案し、そのバックアップのもとに進めるつもりであったが、London での会合はきわめて地味なものであり、この程度のものならば万一学術会議が受入れないことがあっても、日本醸酵工学会として運営することができると（当時）考えた次第である。いずれにしても、8年先のことで、この Session の議題外のことであり、席上とくに反対意見はでなかった。当日の議長は、Miall 氏（英国 Pfizer 社）で、彼は私に対し今後 IUPAC* の役員と接触するようにとのアドバイスをしてくれた。私は、その後、IUPAC のその方面の活動家である Bunker 氏と接触している。
2. 1964年、日本学術会議微研連の会合で前記事情を私が説明し諒解を求めた。何分にも第4回 IFS は1972年であり、実感が出ないせいか、活発な意見の交換はなく、何の決定もなかった。日本醸酵工学会の総会および理事会でも第4回 IFS のことを述べ事後承諾を求めた。
3. 1966年 Moscow での国際微生物学会議では A. E. Humphrey 教授（Pennsylvania 大学）と会談、また会議後、米国 New Brunswick で、W. E. Brown 氏（いずれも第3回 IFS の General Chairman）と会談し準備の状況を調べるとともに日本招致のことについても話合った。
この頃から私は第4回 IFS 招致について、より積極的に公的（微研連など）にも非公式の会合（びわこ会）でも発言し、この問題への関心をつないでもらうようつとめた。（なお、びわこ会は 応用微生物関係の長老達の非公式会合である。）
4. 1967年11月第2回 GIAM (Global Impact of Applied Microbiology) の国際会議が、Addis Ababa で開催され私は EAM (Economic and Applied Microbiology Section of IAMS) の Biotechnology and Bioengineering 専門委員会委員（個人として指名を受けていた）として、かつ研究発表者として招待された。有馬啓氏が ICRO† UNESCO Panel の日本側代表であったが、突然出席不能となった為、この Panel の会合にも代理出席した。結果は、植村教授に詳細口頭連絡したが、その中で IFS 関連事項としては、当分（おそらくほとんど絶対に）日本で GIAM 国際会議が開かれる可能性はないことが明らかになったことで、これは IFS の日本招致には好都合なことであった。
第3回 GIAM 会議は、Bombay、第4回は南米というふうに予定されていた。
別に国際微生物学会議は1970年 Mexico を最後に分割され、その後の応用微生物学関係の大きな会議の開催予定は確かでなく、日本が近くその主催国を押しつけられる心配は薄らいでいた。
5. 1968年春の微研連でも、また、非公式であるが5月のびわこ会でも IFS 日本招致について、正式態度決定の必要性を強調した。微研連越智委員長から、日本招致を進めることの諒解を得たが、どの程度の政府補助が与えられるか不明であった。ただし、委員長は日本学術会議主催という名目だけ（最悪の場合）でも募金に有利であろうとの御意見であった。
6. そのあと、越智委員長の契めにより、学術会議事務局の調査課長（当時）小熊氏と会談、IFS への政府補助金の見通しについて伺った。同氏は1972年度は無理、1971年度（1972年3月末まで）は競合が少いので相当の

* International Union of Pure and Applied Chemistry.

† International Cell Research Organization.

金額が期待できるとの意見であった。(このことを後に委員長に伝えた)。

7. 同 6 月中旬 Sweden 国応用学会会議の招待により渡米した際、私は Helsinki の Finland 国アルコール専賣局研究所を見学し、所長の H. Suomalainen 氏 (IUPAC-FS の議長) と会談、第 4 回 IFS の日本開催の件につき諒解を求めた。
8. 同 8 月、越智委員長から電話連絡があり、1971年度、予算要求上必要であるから、招致 IFS に関する書類を早く提出するようにとのことであった。学会議事務局と打合わせ必要事項をとりまとめ、一応の形式を整え取急ぎ提出した。これは、もちろん試案的のものに過ぎない。
私は海外出張準備で多忙のため、日本醸酵工学会金子事務局長にその案文を持たせて上京させ、越智委員長、植村教授、学会議事務局にそれぞれ連絡せしめた。書類は日本学会会議主催とし、予定地に近い日本醸酵工学会が幹事役をつとめるという構想であった。
9. 1968年 9 月 1 日午後 2 時より Rutgers 大学の Stonier Hall で EAM の役員会があり、あらかじめその役員に指名されていた私にも招集があり、IOBB (International Organization for Biotechnology and Bioengineering) に関する法案の下相談と明年 Sao Paulo で開かれる Biotechnology and Bioengineering 講習会の計画について話されたが、IFS に関係して特記すべきことは、私が EAM の代表として、IUPAC の醸酵工業分科会 (IUPAC-FS) に出席する様指名されたことである。これは第 4 回 IFS との関連性を役員達 (Hedén, Humphrey, Bunkers ら) が考えてくれた結果である。
10. 同 9 月 6 日、7 時 30 分より Rutgers 大学食堂において IUPAC-FS と第 3 回 IFS 組組委員との合同会議があり、第 4 回 IFS への日本の招待を受諾する旨正式決定した。日時場所などについて質問を受けたが、私は凡て未定なるも一応 1972 年 3 月中下旬国立京都国際会館を考えていると答えておいた。
同日午後 Closing Session において、IUPAC-FS の Suomalainen 議長のあいさつと、次回は、日本で開催する旨の発表があり、ついで私は指名を受けたので次のような発言をした。

In 1964, at the plenary session of the 2nd International Fermentation Symposium in London, I expressed our wish to hold the 4th Symposium in Japan.

The Microbiology Committee of the Science Council of Japan and the Society of Fermentation Technology have investigated this problem with intention since 1964. Now, I am pleased to state plainly that we are willing to invite the next Symposium to Japan, and to hold it under the sponsorships of IUPAC and the Science Council of Japan. As the draft concerning Japan as the host country for the next Symposium was approved at the committee meeting this morning, I would like to obtain now the support of all the attendants of this session.

We will be glad to invite to Japan many active members of this field from all over the world. The place and the date of the Symposium will be announced before long.

Welcome to Japan and to the Fourth International Fermentation Symposium in 1972!

11. 同 9 月 9 日、Rutgers 大学 Institute of Microbiology において IUPAC-FS の委員会があり、私は EAM よりの代表として出席した。Langlykke 副議長は、私を IUPAC-FS の Associate Member になってもらうことを、提案し承認された。これは第 4 回 IFS を日本で開催することを考慮した処置として説明された。IUPAC は IFS に対し名目的 Sponsor であり、第 3 回に対してはほとんど実質的な援助をしていない事が判明しており、また、第 4 回に対しても経済的援助は難しいとの Langlykke の発言もあったので、私は第 4 回に対しては Sponsor の名に相応しく 8,000 ドル程度の金を提供するよう IUPAC authority から保証をとってほしいと強く要望した。IFS に関する同委員会の話合の内容を確認すべく私は翌朝、次の内容の文書を Langlykke 氏に手交したが之に対しては異論はなかった。

『日本が主催国となる第 4 回国際醸酵シンポジウムにおいて、IUPAC 醸酵工業分科会は IUPAC authority から補助金を獲得するよう最善の努力をつくすであろう。このシンポジウムは実質的には醸酵工学シンポジウム (Fermentation Technology Symposium) であることが期待されており、そのシンポジウムの運営の仕方はすべて日本の醸酵工学徒の手中に委ねられている。』

附 記 IFS と IUPAC との関係について

IFS は第1回1960年 Rome, 第2回1964年 London という具合に主催国から主催国へとバトンが渡され第3回が米国に決められたが、はじめはとくに国際的常置機関が介在することはなかった。London の時に IUPAC を介在させた方が都合がよいということになり、第3回から、IUPAC の名目だけの sponsorship がはじまった。最初若干の実質的援助を期待した向きもあったが、第3回の New Brunswick の会合に対しても全く援助がなかったようである。第3回会合での招待講演の分は IUPAC 機関紙を出版している Butterworth なる本屋が出版することになっているが、その費用は主催国が出すことになっている。また、Butterworth での出版は経済的に有利だとの保証は全くない。IUPAC-FS は従来醸酵工業生産の世界的な調査とくに統計資料のまとめをやったり、また最近では国際的な標準化の問題をとり上げる意向の様であるが現在のメンバーがそれに適当かどうか、国の代表は、どこでどうして決定されたのか私には諒解し難い点が多い。一方、醸酵生産の科学という面では、IUPAC-FS は、とくに仕事をしていない。強いていえば、IFS を sponsor すること位のものであり、これも主催国決定が主要任務らしい。Langlykke (現副議長, 次期議長) は、より実質的な sponsorship をある程度発揮し leadership を持ちたい意向 (氏のある書簡に示されている) のようであるが、しかし、一にぎりの IUPAC-FS メンバーが高度に進歩した主催国のやり方を指導するというのも一寸おかしい話である。平凡なようだが、主催国から主催国への移行をスムーズに行なうという既定の役割を果し、且つ有意義な集会に対し、“呼び水”的にせよ若干の援助 (たとえば出版費を出す) を行なうというに止まるべきであろう。変な干渉がましいふるまいをすとかえってかなえの軽重を問われるであろう。1972年の第4回 IFS について、IUPAC をやたらに持ってまわるのはあまり意味がないと思う。米国のやり方を見てもわかるようにシンポジウムそのものは実質的にも形式的にも Am. Chem. Soc. の微生物化学工業分科会が主導的に動いており、IUPAC 役員は Banquet の時に他の役員と共にヒナ壇の上に座を持ち以上のことは何もなかったのである。

もちろん将来 IFS と IUPAC-FS との関係、ならびに EAM/IAMS あるいは IOBB との将来の可能な関係については大いに検討する余地がある。